Japanese Association for Religious Studies

言語的宗教構成主義の可能性
――ブランダムの単称名問題を受けて――

松野智章

言語的宗教構成主義の立論の可能性を言語の働きの分析を通して言及したい。具体的には文中の単語の働きについてR・ブランダムの単称名（固有名詞・確定記述）における議論の知見を導入し、言語的宗教構成主義の基盤の明確化を目指すものである。

ブランダムは*Making It Explicit*（一九九四年）以降、意味論において「推論主義」という立場を一貫して展開している。そして*Articulating Reasons*（二〇〇〇年）において彼は単称名について言及している。ブランダムは、人が文を理解する原初状態を想定する。そして、単語が基本単位ではなく、文を基本単位として考える。この考えは、J・ロック以降の名詞と対象の結びつきを言語の基盤として考える見方を否定している。ブランダムは、まず、文があって、そこから単称名と述語を区分するのだという。彼の単称名の論証は次の通りである。それは、二つの文を用意して、文中の単称名の代入推論（Substitution inferences）を行うのである。

一　ベンジャミン・フランクリン（S）は避雷針を発明した（P）。　ならば、

二　アメリカ合衆国の初の郵政長官（S）は避雷針を発明した（P）。

この二つの文章は、一から二が推論されている。そして、この推論はひっくり返して二から一でも問題が起きない。これをブランダムは対称的（symmetric）と定義する。

それに対して、述語（predicate）の場合はどうか。

一　ベンジャミン・フランクリン（S）は歩いた（walked）（P）。　ならば、

二　ベンジャミン・フランクリン（S）は動いた（moved）（P）。

この場合、この一から二の推論には問題がない。しかし、二から一の推論には妥当性がなくなる。なぜなら、「歩いた」より「動いた」の方が包括的だからである。この関係は対称的ではない。よって非対称的（asymmetric）と定義される。もちろん、全ての述語が非対称的だということではない。しかし、単称名が対称的でしかないのに対し、述語は非対称的である可能性を含んでいる。ブランダムはSとPの違いを次のようにまとめている。「構文的に言えば、単称名は代入されることの代入構造的役割を果たし、述語は文の枠組みにおける代入構造的役割を果たしている」（ブランダム、二〇〇〇年、一五〇頁）と。

そして、この代入推論の議論が明らかにしているのは、ある指示語（単称名）を特定・理解するためには最低限二つの文を必要とするということである。つまり、単称名が単独では指示できないことを意味しており、単称名は他の単称名と結びつくことで意味を持つことができる。これは、表象主義のように対象と心のなかの概念が対応し、その概念に照らし合わせて単称名の対称性が保証されているのではない。あくまでも単称名の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

推論を通して人は言葉の使用を身につけるのである。

ブランダムの議論を踏まえれば、私たちが認識する上で対象を特定するためには、経験の問題ではなく論理的問題として、言葉の体系を必要とする。そうして初めて、対象を理解することができる。これは、対象が素朴に実在しているのではなく、先行する言葉の関係性の中に対象が回収されることを意味している。

この議論は必ずしも、宗教的実在や世界の存在を否定してはいない。しかし、どのような対象も言葉の関係性の中でのみ理解されることが立証されるのであれば、諸宗教の「言語の体系」は実在に先立つ。つまり、言語的宗教構成主義は実在主義に対して、明確に優位性を主張できることになる。

基督教に対する理論上の四つの疑問及び理由と当該論の若干の適用

工藤　亨

戦後半世紀余り、カトリックの所謂求道者として歩んで来たが、概して下記の事由で、基督教を仏教の根本理法に基づける結果となった。㈠アリストテレスは「生来人は皆第一の原因・原理（以下、P.C.）を知ることを求める」と云い、トマスとホッブスによると「これ（P.C.）を何人も神と呼ぶ」。処で一般に、言葉（その形・音声および概念）より、言葉が指し示す（denote）事柄の方が先行する。すると自然理性上、基督教の「神」より、用語「神」が指し示す「第一の原因・原理（P.C.）」が先行するであろう。㈡「エリエリレマサバクタニ」と絶叫し、「魂を御手に委ね奉（っ）て息絶えたイエス。獄中から「神の前で…神なしに生きる」と認めたボンヘッファー。神は「真理の源」で把握された「真理」ではないと説いて来た公教会。いずれも、「今見てい(ない)」がしかし念頭にはある「神」に、誠を尽し「信仰」を捧げた。しかし乍ら実は、各々の念頭に宗教的情意と相関的に「源」としてある当の「神」に更に先行して、P.C./P.C.である究極根原理法（ダルマ）（以下、D.p.c.）が先在し、そして万有のP.C.であるその故で、一切事と不可分不可同不可逆であろう。㈢我々が住する理法（ダルマ）一円界には、「一度起ったこと（事象（event））を起きなかったことになすことは、神の全能をもってしてもなしえない」という実体である理法（以下、仮称事象の永遠性（imm.））があって、時空界・永遠界共に妥当する。そしてトマスは、仮に三一の神（以下、D_2）が生まれたみ子・み言（有）を生まれなかったこと（無）になし得れば、有を無となすことになって、神の「合理性」に反するのだ、と云う。しかし乍ら、み子・み言は、D_2の三一の本性の故で同本性によって生まれ、そして一度生まれると即直ちに理法imm.の規制の下にあるその故で、父なる神も、生まれなかったことになしえないのであろう。従って存在論上、「無からの創造」（以下、c.(e.)n.）では、三一神とその本性への第一の他性として、実体理法imm.が外在して相い対しD_2の奥底に先行し先在する故、文字通りのc.n.は成り立ちえない、と認める。そして理法imm.とD_2のc.n.の業は、両者の基底

NII-Electronic Library Service